



研究集録3

神戸大学教育学部附属養護学校

(Citation)

研究集録, 3:0, 2-4

(Issue Date)

1977-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009904>



研 究 集 録 3

神戸大学教育学部附属養護学校

目 次

I	本校の教育について	3
II	本校研究の歩み	4
III	体力グループ	5
	テーマ 楽しく正しい体育	
1.	体力づくりのねらい	7
2.	いきいきとした身体をつくるために	8
3.	本校における過去3年間のあゆみ	9
4.	授業実践から	16
5.	行事を通して	39
6.	遊びを通して	43
7.	そ の 他	45
8.	保健室からみた児童・生徒の様子	47
9.	今後の課題	49
IV	学力グループ	51
	テーマ 話しことばを豊かに ―遊びや物を作ることを通して―	
1.	テーマ設定の理由と研究の進め方	53
2.	小学部のとりくみ	54
3.	中学部のグループ編成による国語学習	61
4.	高等部の言語指導	74
V	集団(情緒)グループ	87
	テーマ より豊かな人と人とのかかわりを求めて ――情緒障害児の事例をとおして――	
1.	テーマ設定の理由	89
2.	研究の進め方	90
3.	事例 ⅴ.1	90
4.	事例 ⅴ.2	95
5.	事例 ⅴ.3	100
VI	おわりに	106

1 本校の教育について

本校では子どもたちが、精いっぱい生きていく喜びの創造を目指して日々の教育に取りくんでいる。子どもたちの一人ひとりが持っている自分で伸びようとする力を信じ、見守り、はげましながら、子どもたちと共に歩むことを基本理念としている。

このように、子どもの主体的な成長への信頼をもとにして教育の取りくみを考えるとき、

- ・ 子どもの願い、欲求、取りまく環境等、実態を明らかにつかむこと。
- ・ 一人ひとりに適切な発達の課題の用意がなされなければならない。 子どもの求めているものと、援助する教師の指導とがうまくかみ合って、からまわりのない教育を…と願いながら現実には多くの問題点をかかえて試行錯誤の毎日である。

本校の子どもたちの場合、受動的な傾向があり、動きが少ない点が問題として指摘された。生活現実の中で課題にぶつかり、実践することで獲得したものこそ身についたものになるのではないか。もっと現実度の高い、きびしい教材が用意されなければ……………。

多くの話し合いの結果、何よりも主体的に取りくむ姿勢の育成こそ、子どもたちの人間形成にとって不可欠のものである。そのために、子どもたちが見通しのもてる目標を設定し、からだを通して、各人の状態に応じて指導し、援助すべきである。どんなに小さなステップでもよい。子どもたちの取りくみの過程をしっかりと受けとめ、一日一日の積み重ねを大切にしていきたい。

人間は本来活動的なものである。子どもたちがそのもっている力を表出したとき、生き生きとした表情、活動がそこにある。

このように考えて、教育目標として「生き生きと活動する子ども」をかかげ、その目標達成のための柱として、

- ・ からだと心の健康 …………… 体力づくり
 - ・ 自由な活動、遊び、学習 … 学力づくり
 - ・ 人と人との関係の伸展 …… 集団づくり
- を設定し、日々の取りくみを進めている。

Ⅱ 本校研究の歩み

本校が、神戸大学教育学部附属明石校園の、小・中学校のそれぞれの特殊学級から分離し、附属養護学校として独立したのが44年である。研究活動は、特殊学級時代から引きつづいたものとして、「発達段階に応じた学習指導」と「生活単元学習における数量指導」について、研究、討議をくり返し、教員全員の意志統一を計ろうとした。45年には、「遊びを通してより望ましい人間形成を目指して」との課題を掲げ、いろいろな観点から遊びを分析し、指導しようとした。46年には新校舎に移転したことにより、新しい施設、設備を充分に活用し、学習効果を高めようと、「生活」「情操」「健康」「作業」の4領域について、その目標、内容、指導方法を検討し、年間指導計画表を作成し、「専科制による効果的な指導のこころみ」として、本校研究集録1をまとめ、第1回の研究協議会をもった。49年には、小・中学部、高等部それぞれの課題を設定し、小学部では「入門期の言語学習」を、中学部では「書きことばの指導を」、高等部では「進路指導のあり方」を研究集録2にまとめ、第2回目の研究協議会をもった。

50年、51年にかけ児童、生徒の実態の中から問題点を見出し、「生き生きと活動する子ども」を目指して、教育実践にとり組んだ。その目標達成の為に、「体力」「学力」「集団」の3本の柱を設定し、本校の全教員は、そのいずれかの研究グループに入ることとし、そのグループ内で、研究・討議・実践・反省をくり返した。勿論、子どもの生活は決して3つの、分野に分けられる筈のものでなく、お互にグループ毎の提携を計り、一人の子どもが、「生き生きと活動する子供」として成長するよう見守ってきた。楽しく正しい体力の中で実践後、日浅く、効果は遅々としていても、自由時間などの過ごし方などの中に、子供が自ら、活動しようとする姿勢が感じられるこの頃である。

なお、労力については、話しことばを持たない子供に主眼を据え、活動することを通して、生きたことばを感じとらせようとした。

集団についても、対人関係の中で問題の多い子供をまず、どうして情緒安定を計らせるかを今年度の研究課題とした。学力についても、集団についても、本論に入りこめない、もどかしさを感じつつ、そのうえ、充分実践しないままに、研究集録第3集を中間報告としてまとめた。

諸先生方のご批判をお願いいたします。